

8. 採卵鶏農場に発生した鶏痘と疫学調査について

大分家畜保健衛生所

○壁村光恵、平川素子、中宗徹、阿部正八郎
病鑑 佐藤亘、病鑑 山田美那子、病鑑 坂田真友子

【はじめに】鶏痘は、ポックスウイルス科アビポックスウイルス属鶏痘ウイルス (FPV) の感染によって起こり、無羽部皮膚や粘膜に特徴のある発痘を示す。ワクモなどの吸血昆虫により媒介され、発育低下や産卵率の低下などが問題となっている。今回、管内の採卵鶏農場にて、鶏痘が発生したので報告する。

【発生状況】16,000羽を飼養する採卵鶏農場で、平成21年7月10日頃から、600日齢の群を中心に死亡率の上昇、その後無羽部の皮膚に異常が認められ、当家保へ病性鑑定依頼があった。農場立ち入り時、約1,500羽に鶏冠、肉垂、眼瞼、その他皮膚の無羽部に発痘など鶏痘を疑う症状が認められた。なお、鶏痘ワクチンについては初生時に行っている。

【病性鑑定】

1. 材料・方法：症状の認められた2羽について、病理組織学的検査として、皮膚病変部をホルマリン固定後、パラフィン包埋標本をH・E染色し鏡検を実施。ウイルス学的検査として、皮膚病変部10%乳剤を発育鶏卵漿尿膜上に接種しウイルス分離を実施。

2. 成績：剖検では、病変は無羽部皮膚のみで、喉頭・気管粘膜などに発痘は認められなかった。病理組織学的検査では、痂皮周囲において有棘細胞層の増生と軽度の風船様変性を観察、わずかではあるが細胞質内封入体(ポリングル小体)の形成を確認。ウイルス学的検査では発育鶏卵漿尿膜上においてポック形成、膜組織に細胞質内封入体を認め、ポックスウイルス分離を確認。以上のことから、「鶏痘(皮膚型)」と診断。

【疫学調査】平成19年4月～平成21年9月現在の、県内における鶏痘発生状況と気温の推移の関連について調査。鶏痘発生状況は平成19年と平成20年に発生は確認されなかったが、平成21年6月に本症例の他に2例の発生を確認。また、気温については平成21年は、平成19年及び平成20年より早い4月上旬から最高気温20℃を超える日が続き、5月においては25℃以上の日が20日間と、最高気温が高い日が多かった。

【まとめ・考察】管内の採卵鶏農場の600日齢の群において、死亡率の上昇・無羽部皮膚に異常が認められ、病性鑑定の結果、「鶏痘(皮膚型)」と診断。当該農場はオールインオールアウトを行っていないため、まずはオールインオールアウトの指導を行った。また、例年夏季前に駆虫を実施していたが、今回の疫学調査から、鶏痘発生要因として、4月上旬から最高気温20℃を超える日が続いたことにより媒介昆虫の活動時期が早期になったことが考えられ、駆虫を3月下旬から4月初旬、もしくは春・夏の年2回実施するよう指導した。

